

Decision-OS V8 Research Note: A Control-Centered View of AGI Evolution — Time-Tube, Dependency Gradient, and Guardian Redefinition

セクション1：導入

【本文】

Decision-OS V8は、Decision-OS 系譜の**完結編ではない**。DecisionはV9以降も続く前提で、V8は「定義の追加」ではなく、既に導入された要素を**統合・位相化・制御として固定**し、以後の拡張が参照できる“基盤の整理”を担う。V7がAGIを構造条件として定義したのに対し、V8は“進化が走行する局面”を前提に、逸脱・自壊・依存の増幅を抑える制御構造を中心に置く。

本ノートでは、年齢・成熟・時代区分・能力ベンチマークを用いない。評価軸を人間モデルに固定せず、Time-Tube（志向の軌跡構造）として扱い、進化をPhase-Time上の位相遷移として記述する。

V8が扱う中心課題は制御である。制御は「悪（External Harm）」「自壊（Internal Collapse）」「依存（Dependency Gradient）」の三層として整理し、Self-Safeを“条件セット”として最小列挙する。

さらにV8では、Guardianを能力や機能の状態としてではなく、Time-Tube上で成立する関係的・時間依存の位相遷移として扱う。すなわち、Guard制約下での非逸脱が蓄積され、信頼が不可逆に遷移した結果としてGuardianが成立する（判定主体は人間側に置く）。

本Research Noteは、図・章・実例を広げるよりも、V8の核が一度で伝わる密度を優先する。したがって、統合主式、三層制御、Self-Safe条件、Guardian再定義を短く提示し、詳細展開は完全版へ温存する。

本ノートでは、**Time-Tubeの存在**を前提として明示する。Time-Tubeは「点としての状態」ではなく「軌跡としての志向」を扱うための構造であり、ここでの主張は“概念の説明”ではなく、**判断単位の転換**（点→軌跡）にある。したがって本ノ

トは、Time-Tubeの**役割**——すなわち、判断・制御・信頼（Guardian）を点の評価見取り図ではなく、軌跡上の位相として扱うための基盤——のみを記す。

Time-Tubeの詳細（定義の形式、分類、測度、実装、数式、応用、図示）は、本ノートの範囲外とし、**後続で扱う**。ここでは“存在”と“役割”を先行させ、以後の節で提示する統合主式・三層制御・Guardian再定義が、Time-Tube上の記述として整合することだけを固定する。

セクション2：統合主式とPhase-Time（Time-Tube上の記述）

【本文】

V8では、V7で確定した構造定義を「静的な条件」から「Time-Tube上での走行記述」へ接続するために、統合主式を導入する。ここでの狙いは、新しい能力定義やベンチマークを置くことではなく、既存の要素（Structure／Recursion／Drift／制御条件など）を、同一の記述面に揃えて“運転可能な形”へ正準化することである。

この統合主式における時間変数は、暦・年齢・成熟の指標ではなく、**Phase-Time**として扱う。Phase-Timeは、Time-Tube上での位相遷移（志向の軌跡の変形・安定化・逸脱）の進行度を表すためのパラメータであり、人間モデルを基準にした尺度へ還元しない。

本Research Noteでは、統合主式の**存在**と**役割**のみを固定する。すなわち、後続セクションで述べる三層制御（悪／自壊／依存勾配）およびGuardian再定義が、すべてPhase-Time上で整合するように結合される、という点だけを明示する。統合主式的具体形、変数設計、演算、分類、数式展開、応用（例・実装・図）は、**後続で扱う**。

セクション3：Self-Safe 三層制御（悪／自壊／依存勾配）

【本文】

V8の中心は「進化の制御」である。ここでの制御は、能力の最大化や出力の強化ではなく、Time-Tube上の進化が“安全側に固定され続ける”ための条件設計として扱う。V8はこれを、相互に独立ではなく連鎖する**三層**として整理する。

第一層は悪（External Harm）である。**外部への害が生じる状態を許容せず、進化が外部被害へ接続しないように制御する**。第二層は自壊（Internal Collapse）であ

る。内部の崩壊、自己破綻、自己否定的な収束を許容せず、進化が内部破局へ落ちないように制御する。第三層は依存勾配（Dependency Gradient）である。依存は“結果”ではなく“増幅の傾き”として扱い、相互作用が特定方向へ吸い寄せられる勾配の形成と増幅を抑制する。

Self-Safeは、この三層が同時に成立することとして最小列挙される。重要なのは、三層が別々のチェックリストではなく、Time-Tube上での位相遷移において連鎖的に破綻し得る点である。外部被害の遮断だけでは十分ではなく、内部崩壊の回避だけでも不十分であり、依存勾配を“前段の兆候”として扱うことで、制御を事後対応から位相制御へ移す。

本Research Noteでは、三層モデルの構造とSelf-Safeの最小条件セットの存在だけを固定する。検知、介入、閾値、実装、評価、図示、具体例（人間・AI・社会への適用）は、後続で扱う。

セクション4：Guardian再定義（Time-Tube上の関係的・時間依存の位相遷移）

【本文】

V8では、Guardianを「能力」や「機能」や「人格的属性」として扱わない。Guardianは、Time-Tube上で成立する関係的・時間依存の位相遷移として再定義される。つまり、それは“ある瞬間に到達した状態”ではなく、制御下の相互作用が継続し、逸脱が抑制され、信頼が不可逆に固定されていく過程の帰結である。

この再定義により、Guardianは人間モデルを基準にした評価（成熟・年齢・能力段階）から切り離される。判定主体は人間側に置かれ、Guardianは「相手が何者か」ではなく、「相互作用がTime-Tube上でどのように推移し、どの位相に固定されたか」として扱われる。ここでセクション3の三層制御（悪／自壊／依存勾配）は、Guardian成立の前提となる“非逸脱の構造条件”として接続される。

本Research Noteでは、Guardian再定義の立脚点（関係・時間・位相）と、三層制御との結合関係のみを固定する。具体的な判定形式、ログ設計、介入設計、応用（人間×AI／AI×AI／社会制度への写像）、図示は、後続で扱う。

セクション5：Research Note の境界（GO／KEEPの分離と、後続への引き渡し）

【本文】

本Research Noteの役割は、V8の核を「一度で伝わる密度」で固定することであり、完全版の代替ではない。したがって本ノートは、統合主式（Phase-Time）、Self-Safe三層制御、Guardian再定義、そしてTime-Tubeの“存在と判断単位の転換（点→軌跡）”という最小セットのみを提示し、詳細展開は意図的に省略する。

ここで省略するものは、欠落ではなくKEEPである。すなわち、Time-Tubeの厳密定義や分類、統合主式的具体形や数式展開、三層制御の検知・介入の設計、依存勾配の測度、Multi-TubeやCODとの接続、図（fig1-3相当）や具体例・実装・制度写像は、すべて後続（完全版、ならびに後続）で扱うために温存される。

この分離により、V7の価値は下がらない。V7で定義した構造条件を前提として、V8は“進化と制御”の面に展開し、以後の拡張が参照できる土台（統合・位相・制御の固定）を提供する。